

# ☆東海農政局長賞

## 【野原村元気づくり協議会】

代表者：鳥田陽史

所在地：三重県度会郡大紀町

### 第1 むらづくりの内容及び成果

#### (1) 地域の沿革と概要

大紀町は三重県の中南部に位置し、東部及び南部は紀伊山脈の分水嶺を境として東部は度会町、南は南伊勢町、紀北町、西部及び北部は大台町と隣接している。

総面積の約91%を山林が占め、地形は全般に急峻で、町内を流れる一級河川の宮川、大内山川、藤川沿いに民家と耕地が散在する農山村部と僅かな土地に民家が集中する沿岸部から成る。

野原区は、大紀町の北東の端に位置し、宮川中流域右岸の僅かな平地に水田、茶畑、民家が点在し、その背後に山々が広がる典型的な中山間地域である。人口は597人で、その36.9%が65歳以上の高齢者となっている。

地域の産業としては、かつては林業も盛んであったが、松阪牛として取引されている七保牛で名高く、高い評価を得ている。

また、野原区には区が運営する野原神社、祖霊社があり、区民のほとんどが祖霊社での神式葬祭を執り行う全国でも珍しい地域で、義務教育費国庫負担に奔走した偉人である大瀬東作<sup>おおせとうさく</sup>の出身地でもある。

#### (2) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景「野原はこのままでは、若者が街に出て行き、農業後継者もいなくなり、荒れた田んぼと高齢者だけになってしまう。」そんな危機感から何とかしなくてはと思いつつ、

何から始めていいのかわからないと考えていた時、三重県自治会館組合主催の県内市町職員の研修として、平成18年10月に野原区を舞台として「野原地元学」が開催された。地元学とは、「地元に学ぶ」という意味で、地域の資源、生活、伝統、文化、自然などがすばらしく、これらが活性化の資源として活用できることを探るた

位置図



七保肉牛共進会

めに、地域外の人視点を活かし、地元の人と共に地域を調べることである。

野原には「あれがない」、「これがない」という「ないものねだり」ではなく、「あれもある」、「これもある」という「あるもの探し」を行うことで、区民にはごく普通のことや生活が、外の目から見ると資源として活用できるものがあった。県内市町職員の研修が本来の目的ではあったが、このような手法で様々な野原活性化アイデアの提案があり、この「気づき」から野原の「元気づくり」がスタートした。



## イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

地元学の成果を生かし、地域の有志の女性9名と自治会役員が地域の天然記念物である葉の上に実を付ける「お葉つきいちょう」のギンナンを収穫し、販売したことから活動は始まった。このイチョウは樹齢400年とも言われ、平成13年に閉校した旧七保第一小学校庭の正門横に鎮座して、区民すべてを見届けてきた大樹である。区民にとって特別思い入れがあり、懐かしさも手伝って、ギンナンは地元や地元出身の人たちから好評を得ることができた。また、伊勢農協と連携して耕作放棄地にオクラを栽培して、農協経由で出荷を行った。これらの出荷・販売によって得た資金が、グループの後の活動に大きく役立った。



その後も有志の区民が手探り状態で活動を続ける中、第二のきっかけが訪れた。それは地域リーダー作りや集落のビジョンづくりを進め、集落機能の充実・再生を目指した三重県の「集落機能再生きっかけづくり推進事業」による「地域の魅力づくりフォーラム」を平成19年10月に開催したことであった。たくさんの方々が集まることで気運が盛り上がり、野原の将来を考えるワークショップを2回、3回と重ねるごとに意見が出るようになり、将来の地域の姿が浮き彫りになってきた。大勢の人がこのままでは近い将来、野原は沈没してしまうのではないかと気づき、再生の想いから生まれた38のアイデアを5つのグループ(「野原の食」、「白岩・奥山川活用」、「大瀬東作さん」、「体験・交流」、「旧七一小跡地活用」)に分類(表1参照)し、グループ別に表に取りまとめた。38件のアイデアごとに優先順位を決め、すぐできることは早速実践ということで、「とうもろこし収穫祭と案山子コンテスト」、「宮川での川釣り体験と猪・鹿肉バーベキュー」、「大紀町ふるさとまつり、滝原宮秋季大祭へのブース出店」、「元気づくり大運動会」など、様々な活動に積極的に取り組んでいった。



表1 野原を元気にするアイデア実行計画表

分類	アイデア	得点	難易度	緊急度			役割分担		
				1年以内	2～3年	時間をかけて	野原区民	協働	行政
野原の食	野原オンリーの特産品づくり	120	C	○				○	
	野原特産品加工施設をつくる								
	野原公園わっけんうまいもん市								
	野原公園産業市の開催								
	野原弁当、東作さん弁当の開発	87	B		○			○	
	野原食堂をつくる								
	七保牛レストランをつくる								
	猪・鹿レストランをつくる								
	鳥田次郎さん宅田舎料理店	38	C	○			○		
	野原楽しくゴミリサイクル								
	野原公園足湯をつくる								
野原公園に健康散策道をつくる	5	A			○		○		
老人パワー活用で農林業復活	5	C	○			○			
白岩・奥山川活用	七保アルプスルート（登山道）づくり	51	C	○				○	
	奥山川に水遊び場をつくる	46	A			○		○	
	女性にやさしい登山・散策道づくり	40	C	○				○	
	東出浅間山からの登山ルートづくり	34	A			○		○	
	白岩ウォーキング（登山道）づくり	8	C	○				○	
	奥山川のもみじがり	0	A			○		○	
大瀬東作さん	大瀬東作さん記念館をつくる	51	B			○		○	
	東作さんの映画づくり	3	B		○		○		
	東作さんの夢実現！1万本桜	番外	C	○			○		
	東作さんの生誕地を保存する	番外	B		○			○	
体験	野原観光コースをつくる	59	B	○			○		
	野原丸ごと体験ツアーを企								

交流	画する							
	宮川体験コースをつくる							
	神々ツアーを企画する							
	無縁仏の整理利用	27	A		○		○	
	七保牛親睦会の開催	17	A		○		○	
	野原への永住をPRする	10	A		○		○	
	野原名人を発掘する	4	C	○			○	
	祖霊社での供養を受入れる (他地域)	3	A			○	○	
	七保牛オーナー制度を実施する	0	A			○		○
野原の古い道具を古民家に 展示する	0	B			○	○		
旧 七 一 小 活 用	区民コミュニケーションの 場づくり	44	B		○			○
	校庭を利用し老人憩いの家 をつくる							
	ミニ図書館・喫茶・健康コー ナー							
	プールを再利用する	24	A			○		○

分 類	野原の皆さんが考えたアイデアを5つのグループに分類しました
アイデ ア	野原の皆さんが考えたアイデアのタイトル
得 点	全 38 アイデアについて取組みたいものに点数を付けた合計 得点
難易度	A：難しい B：中間 C：容易
緊急度	いつまでに実行に移すのか
役割分 担	誰が中心に実行するのか

## ウ 現在に至るまでの経過等について

野原に元気を作っていこうという想いと表1で分類した5つの活動を効率的かつ効果的に行えるように、核となる組織である「野原村元気づくり協議会」を平成20年6月に立ち上げた。更にこの協議会で、「野原10年後の夢」をテーマに話し合いを重ね、「交流」、「特産品」、「産業を創る」、「人を増やす」、「今あるものの有効活用」、「働く場所を作る」、「東作さんをもっと活かそう」、「高齢者の住みよい村づくり」などの『想い』が実現できる『思い』に変化してきたことを感じ始めてきた。区民による地域の見直しから内発的な地域づくりが発生した。そして、協議会のキャッチフレーズ『生涯現役！野原村』として、近い将来、野原区の区費0円を目指し、区民と他地区の人たちが一緒になって、強い野原づくりを進めていくこととした。

活動を進めるにあたって、平成20年7月に農山漁村地域の持続的な発展の基礎をなす「農山漁村生活空間」を保全・活用し、持続可能で活力ある農山漁村を実現するモデル的な取組を支援する農林水産省の「農山漁村(ふるさと)地域力発掘支援モデル事業」に採択されたことで区民のモチベーションが上がり、活動が活発になっていった。平成22年6月には「農山漁村地域連携プロジェクト(広域連携共生・対流等推進交付金)」、平成23年5月には食をはじめとする農山漁村の豊かな地域資源を活かし、集落ぐるみの都市農村交流等の促進支援を行う「食と地域の交流対策交付金」に採択された。協議会では、平成20年からの5年間で第一ステージとして様々な制度を活用して地盤を固め、平成25年度からは第二ステージとしてさらなる活動の飛躍を考えている。

### (3) むらづくりの推進体制

#### ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

協議会は活動を進める上で中心的な役割を果たす36名で構成され、区の170世帯(全世帯)とともに、地区ぐるみでむらづくりに取り組んでいる。年間の活動計画は、毎年5月頃に開催される総会で決定される。役員は会長1名、副会長1名、会計1名、監事1名の計4名(うち女性1名)で構成されている。協議会は全体会議が月1回、グループ別の会議が月1回開催されており、活動の報告や確認などを行っている。また、協議会では取り組む活動を徹底的に見つめ直すため、6つのワーキンググループ「野原の食グループ」、「白岩奥山川活用グループ」、「我が東作さんグループ」、「体験交流グループ」、「旧七一小跡地活用グループ」、「公園管理グループ」を持ち、それぞれのグループごとに代表、副代表、会計を置き、地域活性化を目指して活動している。(図1参照)

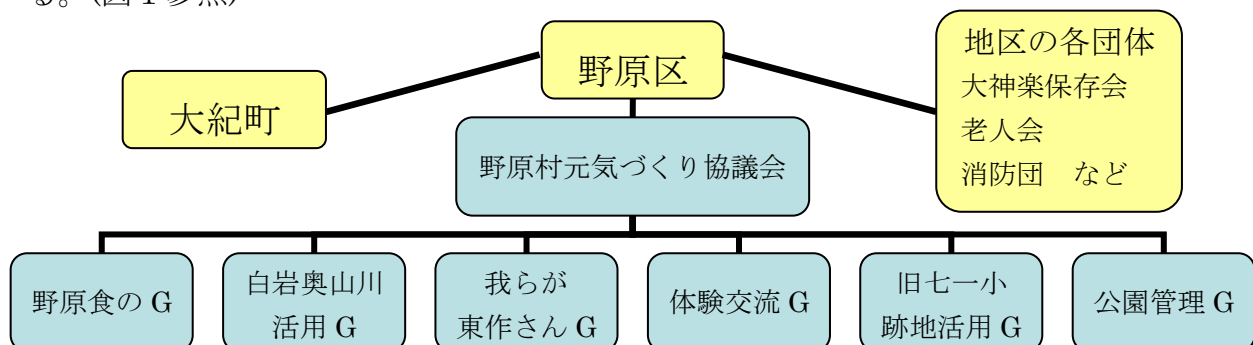


図1 野原村元気づくり協議会の組織図

イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

協議会では多様な主体と連携しているが、地元の七保小学校とも活動を行っている。将来を担う子供達も地域づくりに参加し、自分達が暮らす野原区、七保区のことを深く理解することで、子供の目線での発想やアイデアも取り入れることができるのではないかと考えている。誇りを持って都会に出る子供、地元に残ってくれる子供、ふるさとに帰ってきてくれる子供を育てていくため、4年生を対象に「七保の宝物探し」と題して、子供たちが地域の大切な宝物を探し、地元の町おこしを考える授業を行っている。講師には茨城県で、絶滅が危惧されている多年生浮葉植物のアサザの保全、霞ヶ浦と北浦の再生、地域振興や地域ぐるみの環境学習等を行っている「NPO法人アサザ基金」の飯島氏を向かえ、出前授業をしてもらっている。



飯島氏による出前授業

ウ むらづくりに関して、各集落の住民の当該集団等や連携する他の組織、団体との関係及び参加状況等について

協議会では、キャノンマーケティングジャパン(株)の社会貢献活動である「未来につなぐふるさとプロジェクト」と連携して、農業の後継者対策や耕作放棄地対策をしている。このプロジェクトは、キャノンがそのビジネスパートナーやNPOと連携し、国内の14ヵ所で森づくりや山村での棚田の保全、干潟の保全活動などに取り組んでいる。詳細な活動については、次項で紹介する。



(4) むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

ア 当該集団等の農林漁業生産、流通面の取組状況

協議会では、直接農林漁業生産をしている訳でないが、大紀町の補助で改装した旧七保第一小学校を利用して、区民のアイデアの中で一番取り組みたい内容であった「野原工房げんき村」を平成21年7月から運営している。地元農水産物をふんだんに用いた「地産地消の野原げんき弁当」や獣害対策として捕獲した猪と鹿を利用した猪丼、鹿肉コロッケなどを販売するとともに、野原で栽培した野菜を直売する「青空市」も開催している。



『野原工房げんき村』店内

毎週土曜日のみの営業だが、野原の農作物の重要な販売ルートとなっている。このようなとりくみから、耕作放棄地での野菜栽培などが少しずつではあるが始まっている。また、前項で紹介した七保小学校の「七保の宝物探し」とキャノンマーケティングジャパン(株)の社会貢献活動である「未来につなぐふるさとプロジェクト」と連携した活動も行っている。

まず、子供たちによる現地調査、聞き取り調査を行ったところ、茶畑が七保の宝物に変わるのではという提案があり、「お茶のブランド化」を目指して授業を展開していった。この活動に対し、キヤノンの協力が得られ、平成22年10月から子供たちと野原新田の栽培を止めていた茶畑(約3,000㎡)の再生活動やお茶づくりを、キヤノンの社員、地元住民と小学生などが野原の茶畑をフィールドに活動している。

平成23年3月には小学生13人が商品のネーミングとパッケージデザインを行った。商品名は「七保の宝探し」の際に、七保の人たちの心の「暖かさ」を感じ、この授業により13人のクラスメイトの「きずな」が生まれたことから、「七保のお宝 あたたかきずな茶」と名付けた。平成23年5月には初めての茶摘みを行った。

小学生、キヤノンの社員、地区の方等の計101人が参加し、機械摘みが主流となった現在では珍しい手摘みをして、小学生やキヤノンの社員には新鮮な体験、野原区民には地域の魅力の再発見に繋がるとともに、農業の新しい形ではないかと、今後の展開に期待している。



茶摘み



あたたかきずな茶

## イ 当該集団等による生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備等への寄与状況

前項で記載した「野原工房げんき村」は野原食のグループが飲食店営業、菓子製造業の許可を取得して、地元農水産物をふんだんに用いた「地産地消の野原げんき弁当」などの特産品づくりをしている。店は地元の憩いの場を兼ねた喫茶と地元特産品を使ったオリジナル商品の販売所で構成されている。年間売上げは約500万円で、食堂の人気メニューは300円の猪丼(生卵付き)と120円の鹿肉コロッケ(3個入り)で、限定50食がほとんど完売している。

猪丼と鹿肉コロッケで猪と鹿の肉を使うことは、地元の悩みの種であった獣害の対策にもなることから、地元からの要望も強かった。しかし、食肉処理業、食肉販売業の許可を持つ方がいなかったことから、地元肉の入手は難しかった。そんな中、地元猟友会が食肉処理業と食肉販売業の許可を取得してくれたことで、商品開発に目処がついた。しかし、通常の猪肉は固くにおいが気になる問題があった。その課題を狩猟直後の適切な血抜



『地産地消の野原げんき弁当』



鹿肉使った『鹿ちゃんコロッケ』

きとその後の保存方法、調理の際の調味料の工夫など、試行錯誤を重ねて猪丼を完成させた。猪丼は多少甘みが強いが、そのことでご飯が進むとの高い評価を得ている。猟友会からは、駆除しても肉が廃棄されるのであれば、無益な殺生ということで駆除をためらっていたが、利用法が確立されたことから必要な害獣駆除がなされるようになった。野原では、人里に降りてくる鹿などが激減し、ほとんど獣害がなくなるという副次的効果も得られた。平成22年に三重県が野原区民を対象として実施した平成21年から獣害がどう変化したかを調査したアンケート結果では、被害が減ったと回答したのは、獣肉として利用できないサルが12.7%、獣肉として利用できるイノシシが56.0%、シカが46.0%と、獣肉の利用が獣害対策に繋がることがわかった。野原では、里にワナを仕掛けてかかった害獣のみを利用して資源管理を行っているが、今後も資源管理を行いつつ、獣害に苦しむ周辺地区に出没する害獣を、周辺地区と連携して利用していくことも考えている。

ウ 当該集団等の活動による構成員等の経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進状況等について

「野原工房げんき村」は、売上げを伸ばすために大紀町から飛び出し、イベントなどで出張販売を行い、鹿肉コロッケや地域特産品のPRにも力を入れている。単価設定や広報など、収益構造を確立するまでにはもう少し時間がかかるが、他の活動も収益を上げられるよう検討している。体験交流グループでは体験学習の受け入れやエコツアーリズムなどの事業化を考えている。

当面の目標は、事業によって関係者がそれぞれ収入を得つつ、収益で各世帯が毎年納める2万5千円の区費を少しでも低くすることとしている。

協議会の活動は、新聞、テレビなどメディアによる取材が25件、行政関係、自治会などの視察が22件あり、広く知れ渡るようになったため、現在では地元の人たちや近隣市町だけでなく、遠くは奈良県や愛知県からも訪れる方がおり、やる気UPにつながっている。また、鳥田会長は平成23年度から都市と農山漁村の交流を進めるための実践者である三重県の「交流アドバイザー」として、研修会等で野原でのノウハウを県内に広めていく活動も行っていく。

#### (5) むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

ア 当該集団等の生活・環境整備面の取り組み状況

平成13年に閉校した旧七保第一小学校の木造校舎を野原区民が様々な形で活用して生活に役立てている。(表2参照)

表2 旧七保第一小学校の利用表

活用項目	内 容
喫茶おはつき	協議会の七一小活用グループのメンバーが中心となり、毎週土曜日の野原工房げんき村の営業に併せて、教室の一つを喫茶コーナーと野原工房で購入した弁当などを食べるスペースとして活用
書道教室	閉校になってから地元の方がボランティア講師となり、地域の小学生に書道教室を開催
野原木工塾	塾長が大工さんの木工塾が、テーブル、イス、棚など木工製品を製作販売しており、イベント時は木工教室も開催
東作舎	郷土の偉人、大瀬東作さんの功績を広く周知するための資料展示
大正琴	地元の方が講師の教室を開催している。地元イベントで大正琴を披露
写真クラブ	地元住民の趣味が発展した写真クラブで、自慢の写真を展示
図書館	不要になった本やマンガを集めて、気軽に楽しめる図書館を開設
卓球	校舎が開いているときは誰でも卓球を楽しめるようにしている
青空市	野原朝市グループが中心となり、野原で栽培した野菜を校舎入口で毎週土曜日販売
元気づくり大運動会	閉校と同時に消滅した区民運動会を協議会で復活させ、これまで2回開催し、多くの地元住民が参加



喫茶おはつき



図書館



元気づくり大運動会

また、協議会はげんき村カード(QRコードが付いた名刺大のカード)を発行して区民に配布しており、毎週土曜日の野原工房げんき村営業時に、校舎内にカードリーダーを設置して、げんき村に来た区民に1ポイントがたまる仕組みをとっている。たまったポイントは景品に交換できるため、ほとんどの区民がポイントをためている。このシステムは災害発生時の安否確認などを目的に開発されたもので、三重大学生物資源学部協力のもとに設置されている。ポイントカードとすることで区民一人一人がどのくらいげんき村に来ているのかを把握できるため、高齢者の安否確認をすることができている。あわせて、野原工房げんき村に来たくても来られない高齢者などの区民のために、「地産地消の野原げんき弁当」などの宅配サービスを行っており、区民のニーズを把握した活動も行っている。



げんき村カード

イ 当該集団等による生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民との交流等への寄与状況

山頂からは伊勢湾をはじめ青山高原、伊勢平野やリアス式海岸を一望できる素晴らしい眺望が望める度会山地を代表する標高778mの一等三角点「七洞岳」には多くの登山客が訪れている。白岩奥山川活用グループが野原側からの登山ルートを増設し、登山口に案内看板と登山道にも小さい案内板を設置するなどして、さらに多くの登山客を誘致する活動を行っている。

また、体験交流グループでは体験をとおした交流事業を展開している。トウモロコシ収穫祭、川釣り体験、鹿肉バーベキュー、注連縄づくり教室、木工教室など、地元の方が講師となり、地元小学生だけでなく、地域外からも広く参加者を受入れている。

毎年5月3日に行われる野原区最大のイベント「東作さんと藤まつり」の会場でもある野原公園は、日頃から藤棚の剪定、花壇の整備など、野原公園管理グループが中心となり管理をしている。藤棚の剪定には愛知県から職人や植物の講師を招いて講習会を開催し、本格的な管理を目指している。

義務教育費国庫負担に奔走した郷土の偉人「大瀬東作」の夢であった野原に桜1万本を植栽する計画を復活させようと、野原区民で桜の苗木の植栽を始めた。まだ160本程度だが、将来は「大瀬東作」の夢がかなうよう活動を続けていくこととしている。

また、旧七保第一小学校の1つの教室を「東作舎」として整備して、大瀬東作に関する資料展示をしている。



七洞岳登山口



トウモロコシ収穫祭



東作さんと藤まつり



桜の苗木の植栽



東作舎

ウ 当該集団等の活動による地域への定住促進、女性の社会参画の促進状況等について

「野原工房げんき村」や「青空市」の店舗運営を中心として担っているのは、野原の食グループを中心とした20人の女性であり、毎週土曜日に地域特産品の調理、販売を行っている。獣肉を利用する際は、モンゴルの羊料理である「シュウパウロウ」を参考に、ネギとショウガ、塩を入れて2時間煮込む調理法を考え、独特の臭みを抑え込む等の研究も行っている。また、工房で利用する食品は地元産としており、地産地消の推進で、土地が豊かになるとともに、住民の健康や地域の元気向上を目指す等のこだわりを持っている。このようなことに直接携わっていくことが、野原区に住む女性のやりがいや生きがいにつながっていくのではないかと協議会では考えている。また、七保小学校の「七保の宝物探し」、体験グループの「トウモロコシ収穫祭」等の体験、「元気づくり大運動会」等で協議会の活動に子どもが参加することによって、親も一緒に参加するようになってきている。このように子どもをきっかけとして、親の世代の巻き込みも始まっており、活動の継続性に繋がればと考えている。

## 第2 むらづくりに関する所見

地元の人たちが出した様々なアイデアを行動に移し、目に見える形で仕上げていくためには時間がかかるものも多くある。現在中心となって活動している人たちの年齢をみると60歳以上とかなり高齢である。持続可能な活動にしていくためには、どうしても若者や子どもたちと一緒にあって、この活動に取り組んでいく必要がある。協議会の鳥田会長は、「こうした地域の再発見のなかに、子どもたちを巻き込んで取り組んでいく体験学習的な事業も見えてきた。400年近くも地元にしっかりと根を下ろした大木『お葉つきイチョウ』のようにどっしりと腰を下ろし、これからの400年を見据えて子どもたちと一緒にあって地域の魅力を発見し続ける野原村元気づくり協議会でありたい。」と語っている。

協議会の活動は、以前から野原にあった区民が気づいていなかった資源に、区民自身が気づき、磨き上げることで、中山間地域である野原に住む人としての誇りが再生してきているのではないかと感じる。野原には鳥田会長という強いリーダーシップを持つ方がおり、様々な資源や歴史もある。これらがうまく噛み合って、地域振興に結びついている優れた事例であるため、豊かなむらづくり全国表彰事業に推薦することとする。